

農における霊性の探求

—自分教の確立に向けて—

津野の 幸人

津野幸人先生（鳥取大学名誉教授）は、愛媛大学農場の開設に携わり、また（公財）自然農法国際研究開発センターの開設時の理事を務められ、鳥取大学では自然農法水田のヨシの刈敷技術の特徴を明らかにし、温水堆肥に応用する技術や紙マルチ技術を開発しました。日本作物学会の会長を務め、有機水稲作で最も問題となる水田雑草の抑制技術普及の礎を創りました。

現在は愛媛県松山市に居をかまえて、水稻布マルチ直播栽培研究会会長として『綿幸媛通信』で稲作講座などを連載しています。布マルチは、従来綿製品を作る過程で出るくず綿を原料とした不織布シートに種もみを挟みこんだもので、水稻直播有機栽培用の不織布シートです。津野先生と丸三産業株式会社が共同開発しました（<http://www.marusan-sangyo.co.jp/intro/cloth/>）。

ここでは病貧争絶無の世界を目指す岡田茂吉に共鳴する先生が、「農における霊性の探究—自分教の確立に向けて—」と題して綿幸媛通信74〜76号（2017年）に掲載した「論説」の一部を割愛のうえ再編集してお届けします。

なぜ宗教は戦争の火種となるのか

われわれの未来には気候変動、環境汚染、資源枯渇そして戦争など、推定不可能な要因が多い。サミュエル・ハンチントン（1927〜2008）は、冷戦が終了しても国際間で対立がなくなるどころか、むしろ文化に基づく新たなアイデンティティーが生まれて、文明間の対立が生じているという（『文明の衝突』集英社）。この説は世界的なセンセーションを巻き起こした。1996年の発表とはいえ、その可能性は否定できないばかりか、彼の予言は的中しそうな情勢だ。彼は文明を西欧、中国、イスラム、ヒンドゥー、スラブ、ラテン・アメリカ、発展途上とはいえずフリカ、そして日本の八つに分類する。さらに世界に西欧民主主義という普遍的な文明が広がるという考えを排して、将来は中国文明とイスラム文明の勢力が拡大して、儒教—イスラム・コネクションを形成し、これが西欧に敵対する構図が出現する。やがて日本も中国と組んで西欧対非西欧とい

著者略歴



1930年生まれ。1953年農林省入省、1967年愛媛大学助教授、1974年鳥取大学農学部教授、1990年京都大学アフリカ地域研究センター教授（併任）を歴任し、1992年には日本作物学会長ならびにアジア作物学会長に就任。1985〜1989年（財）自然農

法国際研究開発センター理事。1993年鳥取大学農学部長を経て、1996年より鳥取大学名誉教授。著書に『イネの科学』、『農学の思想』、『小農本論』、『小さい農業』（いずれも農文協）。

う対立構図の一翼を担うだろう、と予言する。

人間は自己の利益を追求するうえで、合理的な行動をとる前に、まず自身を定義付けなければならない。そうした自身の定義付け、つまり実存の主張であるアイデンティティーとしての文明が、人類相互間の紛争につながるというわけだ。さらにハンチントンは、宗教は文明を確定する中心的な特徴であり、「偉大な宗教は偉大な文明を支える基礎である（クリストファ・ドーンソン）」と、とらえた。

現代において、宗教人口を伸ばしているのはイスラム教である。私は、ホメイニ革命時にイランに長期滞在していたが、ホメイニがイラン民衆に



ラジオでこう呼びかけた。「われわれイスラム教徒は西欧文明を受け入れた。その結果人々は彼らの文化であるエンターテイメントに毒されてしまった。われわれイスラム教徒の失ったものの大きさを反省してみようではないか」と。ホメイニ革命の本質は、ハンチントンという「文明の衝突」であった。

人類の幸福追求を願う宗教が、

二元的世界の相剋を克服する霊性

人にはその価値観を超えて、心の底から感動する刹那がある。それは理性からくる道徳律をはるかに超えるものだ。利害、愛憎を超越した感動の根源は何だろう。これらは人間が共有する霊性から発するものではなからうか。霊性について鈴木大拙（1870～1966）は著書『日本の霊性』

の中でこう述べている。「精神または心を物（物質）に對峙させた考えの中には、精神を物質に入れ、物質を精神に入れることはできない。精神と物質との奥に、いまひとつ何かを見なければならぬのである。二つのものが對峙する限り、矛盾・闘争・相克・相殺などとい

なぜ、人類に不幸な状況をもたらすのか。西洋哲学では、カント（1724～1804）、ヘーゲル（1770～1831）の時代に、宗教の本質を分析して、祈祷・呪術を含むものを「実定宗教」とし、奇跡信仰を排除して理性で理解できる宗教を「理性宗教」として区別した。例えば理性宗教としてキリスト教の本質を解釈すれば、「隣人を愛せよ」に尽きるという。こ

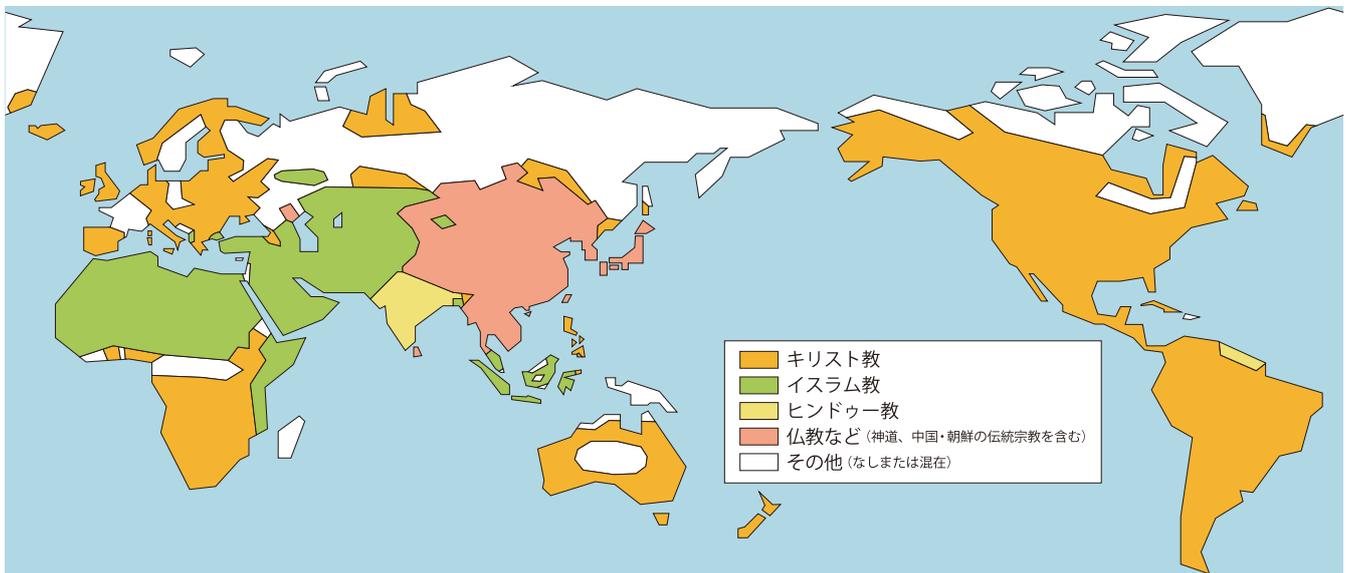
うことは免れない。それでは人間はどうしても生きていくわけにはいかない。なにか二つのものを包んで、二つのものが畢竟するに二つでなくて一つであり、また一つであってそのまま二つであるというところを見るものがなくてはならぬ。これが霊性である。

今までの二元的世界が相剋し相殺しないで、互譲し、交歓し、相即相入するようになるのは、人間霊性の覚醒にまつより外ないものである。言わば精神と物質の裏に今一つの世界が開けて、前者と後者とが互いに矛盾しながら、しかも映発するようにならねばならぬのである。これは霊性的直覚または

の論法に従えば仏教の本質は、「あらゆる生き物に慈悲を施す。」これに尽きると思われる。文明の衝突を避けるうえで、不殺生という戒律を掲げる仏教の役割が期待されるのだが、その現状は悲観的だ。その宗教が人類の対立を深める結果となっている。これは既成宗教が現代という時代―原爆の戦争使用・文明の衝突―への適応に怠慢であることが理由ではないか。

自覚によりて可能となる。（中略）
 霊性を宗教意識と云ってよい。ただ宗教というと、普通一般には誤解を生じやすいのである。日本人は宗教に対してあまり深い理解を持っていないようで、あるいは宗教を迷信のまたの名のように考えたり、あるいは宗教でもなんでもないものを宗教的信仰で裏づけようとしたりしている。それで宗教意識といわずに霊性というのである。（『日本の霊性』角川ソフィア文庫 p.29）

（この部分のテキストは上記の引用と重複する内容を含み、ここでは省略する）



世界の主要な宗教の分布図 (wikipedia より作図)



春を迎えた魚住農園の風景

神仙（宇宙の意思）と一体化できる人生とは

大災害時には、多くの人がボラunteerとして救援活動を行う。困った人を助けたいという本能が人間には備わっているのである。この無償の利他行為―仏教でいえば菩薩行―のとき人は神となる。人は誰でもその心と行動によって、いつでも神仙と一体化できるのだ。「他人への奉仕では生活がでない」と反論される方が多いと思うが、生活と奉仕を両立させるのが人間の甲斐性というものである。この甲斐性をもつ人（真人）の養成に学校教育は機能しなければならない。

ごく最近のことであるが、菩薩行の見本に出会った。かねてから布マルチ栽培※を通してお付き合いのある魚住隆太さん（魚住サステナビリティ研究所代表）から「パクチーお好きですか」というメールをいただいた。有機農産物を知人に無償で送っているのだ。同氏によれば、これは「恩送り」の行為

仏教の持つ宇宙的視座

わが国においても、明治期はわが国在来の文明と西欧文明との衝突期であった。物質文明においては西欧優位であり、無条件にこれを受け入れた。西欧人の象徴であるキリスト教を

だという。語源を伺うと「誰かから受けた恩を、自分は別の人に送る。そしてその送られた人が別の人に渡す。そうして恩が世の中をぐるぐる回ってゆくということ」と、ネットにあると知らせていただいた。魚住さんはこれに次の二点を加える。

①すぐに恩送りをする必要はない。自分ができるようになってからよい。
②恩は経済的なものに限らない。親身になって相談に乗る。笑顔で人に接すること。

いわゆる仏教の布施である。このような「恩送り」が盛大に輪廻していけば、世の中どれほど明るくなるであろうか。上の写真は魚住農園である。私には「甲斐性天国園」に見える。この農園を訪問したい。きつと次の歌の状況に出会おうだろう。

花摘む子らに野の道問えば
蝶のゆくえと花で指す

受け入れたのはごく限られた知識階級であった。内藤鳴雪（1847～1926）は、子規派の俳人として有名であるが、彼ははれつきとした松山藩高級武士で、儒教を学んで育った。彼

※水稲布マルチ直播栽培は、田の排水が完全にできる条件を整えて、確実に布浮かべ（布マルチ栽培）を実行すれば、どなたでも簡単に超省力の稲作ができる。浮いた労力で畑作物の有機栽培をやろう。これは決して難しいものではない。太平洋戦争の直後まで、我々の先輩が伝統農法でやり通してきたものだ。



の思想形成を語るものとして、維新後に書かれた『鳴雪自叙伝（岩波文庫）』がある。これは松山藩の維新前後の事情を知る上で資料的価値が高い。

彼は、子息、惟行氏を30歳の若さで失った。「結局死ということは人間の煩悶苦痛を免るる事なので惟行の如く早く世を去るのは、つまり厄介な人間生活の年明けである、息を引き取るまでこそ志の遂げざる事を口惜しくも思うが、死んでしまえば空々寂々で、楽しみのない代わりに悲しみもない、今まで脳で働いていたエネルギーは宇宙に遍満せる絶対エネルギーに帰してしまったのである。そして私も早晚そうなると思うと、彼が先駆けたのを羨ましくも思った。」（p.339）

右の太字で記した部分こそ、密教誕生までの仏教が避けてきた「梵我一如」の思想に他ならない。鳴雪が「哲學的悟り」と称するのは、真言密教から呪術的（まじない）部分と地獄思想を取り去ってしまった状態であると考えられる。さらに言えば、鳴雪の死生観には、元土佐藩士・中江兆民（1847～1901）の哲学の投影を感じる。兆民はフランスに留学して哲学を学び、本格的な西欧哲学の紹介者である。彼の思想は著書『一年有半』に残されているが、その唯物論に立脚した生命論は先鋭的で新鮮である。また、死生観には密教的な匂いを感じる。

密教的死生観とは、個我（アートマン）と大我（ブラーフマン）との合体を理想とするバラモンの発想であって、密教の風土で育った人間が共有するものではなからうか。ちなみに、旧制松山高等学校の先生方のうち松山市の出身者には鳴雪と同じ死生観を披露される方が多かった。

私は在米中には、滞在先の家族と共に清教徒の教会に通った。教会員はやさしく歓待してくれて、やがて私に改

食物連鎖の頂点に立つ人間の倫理

生命の営みを科学的にみれば、宇宙に存在する多種類の元素のうち10種類程度の元素を材料にして、地球上でタンパク質の合成を行い、そのメカニズムを支配する遺伝子を後代に遺すことである。これはなにも、人間の特権ではなくて、中江兆民の指摘した通り生物全般に共通する基本原則である。ただ、元素を組み合わせて生きものたらしめたのは、神の仕業としか言いようがない。したがって、生物はみんな宇宙神の分身である。そして、万物の生命は平等であり、網の目のような食物連鎖によって、すべての生き物は共生関係にあるのだ。

有機農業での真の収穫は、「万物共生」という心境であると思う。食物連

宗を熱心に勧めたが、真言宗の風土で育った私には、神の救済は非常に遠い距離にあった。大日如来という宇宙仏の分身であることを意識し、宇宙の生命を共有するすべての生物はたがいに共生関係にあると信じる私には、地獄の存在を信じることはできなかった。

宇宙の意思として生命を与えられた地球上の生物には、二つの本性、生存欲望と子孫増殖欲望があり、それは生物間の食物連鎖によって支えられている

鎖の頂点に立つ人間には、環境保護の倫理的義務が負わされているのである。絶対に農薬を使わないと決意し、それを実行したとき、人は自分教の教祖となる。すべての生き物が仲間となる。蝶にも小鳥にも「恩送り」をしよう。既存宗教に依拠しないで、自発的意志によって、右のような立場をとるのが、私の云う自分教なのである。

しかし、人間は高度の知能を駆使して、他の生物を食料とする。しかも莫大な自然資源を人類だけのために消費する。この智慧を有するがために地球環境を破壊しているのだ。生物は種という単位で分類されているが、高等動物の基本則は同種を食料としない。つまり、共食いを避けて相互扶助を原理

とする存在である。ただ高度の知能を有する人間だけが国家を作った。人種とか言語の共通項を軸として国家が形成されているが、大事なことは、国家の発生には何らかの宗教が国民を結束させる役割を果たしているということだ。そして、それが特色ある固有の文明を産んだ点である。やがて、それぞれが固有の文明に固執し、その拡大を希求するようになる。故に「文明の衝突」は避けられないものとなる。キリスト教のいうとおり知恵を人間の原罪と認めざるをえない。自我に固執する知恵は悪魔の知恵だ。

（万物共生）。つまり他者の生命によって自己の生命が支えられている。故に、他者を失えば自己を失うのである。ここから、仏教の示す不殺生戒が生まれるが、これは生きるためには順守できないという絶対矛盾に直面する。この局面において「慈悲」が、先に述べた霊性的意味を持つのである。この立場からは、宗教がすべての命を全うさせようとする人間の本性に基づくものと定義づけることができる。

とする存在である。ただ高度の知能を有する人間だけが国家を作った。人種とか言語の共通項を軸として国家が形成されているが、大事なことは、国家の発生には何らかの宗教が国民を結束させる役割を果たしているということだ。そして、それが特色ある固有の文明を産んだ点である。やがて、それぞれが固有の文明に固執し、その拡大を希求するようになる。故に「文明の衝突」は避けられないものとなる。キリスト教のいうとおり知恵を人間の原罪と認めざるをえない。自我に固執する知恵は悪魔の知恵だ。

既成宗教は平和を守れなかった

仏教は、わが国伝来の当初（538年）から権力者の庇護を受け、その呪術・祈随をもって権力者に報いたのである。この傾向は、理論的に高度化された天台宗（805年）、真言宗（806年）においても払拭することができなかった。12世紀にいたって親鸞や道元が権力者の庇護を排除したのである。なかでも親鸞の教えは、阿弥陀如来という一神崇拜である。

神職者のいる大きな神社には仏像が祀られ、神さんと仏さんは一体のものとして、われわれの先祖は崇めてきたのである。ところが幕末には国学者系の尊王運動が力を得て、慶応4年には神道国教化政策がとられた。その結果が廃仏毀釈となって神社から仏さんが追放されてしまった。以後、国家神道が従来 of 宗教の上位に座り、国民の崇拜を強制した。

宗教や道徳が国家から与えられる限り、それは戦争防止の役には立たない。国家神道への危惧をいち早くとらえた金子光晴（1895～1975）の詩「燈台」の一節を紹介しておく。

こころをうつす明鏡だという空を
かつては、いみおそれ、一神はい
ない。と、おろかにも放言した。

それなのに、いまこの身の、神の戒めのきびしいことはどうだ。うまれおちたということとは、まず、このからだを神にうられたことだった。

おいらたちのいのちは、神の富であり、穢（いけにえ）とならば。すすみたつてこのいのちをすてねばならないのだ。

この詩は昭和12年日中戦争開始の年に発表されたものだが、戦争は相手国だけではなく自国民にも犠牲を強要する。日本は神国だから、必ず「神風」が吹いて戦に勝つ、という国家神道の呪術を私たちは信じ、祈禱していた。

雑誌・文芸春秋2012年12月号特集「日本人のための宗教」というタイトルで、山折哲雄氏（昭和6年生まれ・宗教学者）との対談で、元花園大学学長・河野大通氏（昭和5年生まれ・臨濟宗妙心寺派管長）は、仏教が国家に取り込まれ戦争に加担した経緯を語る。「仏教の根本理念とは人間の平等と命の尊重にあると考えますが、しかしながら日本の仏教教団は、時流におもねり戦争に加担した過去がある。それも仏教の論理、しかも私たちが教義とする禅の論理を戦意高揚に用いた。

『仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し、生死岩頭において大自在を得ん』という言葉をひいて、戦場こそは禅の修業道場だと兵隊を叱咤し、そればかりか修行中の僧を兵隊として戦場に送り込んだ。「戦争をしないで国民を平和に生活させること、これが政治家の第一義の責務だ。私たち戦争を経験した老人たちにも責務がある。

キリスト教徒の中でも欧米のプロテスタントたちは、労働は神の意志にかなうもの、とされ勤勉を尊ぶ思想が強い。北米ミシシッピ―河地方で接したプロテスタントの農民たちは、禁酒・禁煙で貯蓄に励み、教会への献金が彼

農に靈性を求めた人たち

生命の起源については、いくつかの科学的仮説があるが、化学元素を素材として生命が誕生したのは確かである。これら元素を組み合わせて生命を吹き込んだのは神の行為であって、この神を唯一の神とみるか、あるいは諸神の最高神と見るかは宗教によって異なる。

二宮尊徳（1787～1856）は、私の道で尊ぶのは、天地が万物を生育するのを助ける大道で、天津神の積んでおかれた無尽蔵から、鍬鎌の鍵をもつてこの世に取り出す大道である。

らの生きがいであるかに見えた。しかしながら、教会によって組織化された信徒は、保守党の基盤であり、神の意志は国家によって実現される、という説教をたびたび聞かされた。この論理は理性宗教を主張したヘーゲルのものでもあった。

ならば、世界平和のためには、国家権力から完全に独立した宗教が必要である。戦争に駆り立てられた暗黒の時代の詳細を語り継ぎ、後世に残すべきだ。受け身で与えられた既成宗教では世界平和は実現できないと悟るべきであろう。

「我というその大本を尋ねれば、食うと着るとの二つなりけり」と詠んでいる。そして、明日の食に気を配り「腹くちく食うて搗きひく女子らは、仏にまさる悟りなりけり」と、称える。尊徳にとっては、与えられた命を生き抜くというのが至上の行為であり、天命と受け止める。尊徳は人間を米食い虫にたとえ、この虫の仲間での約束ごとは、「衣食住の財を生産するのを善と定め、これらをいたずらに損傷するのを悪とする」と、倫理規定を行い、この道は



人道であつて天道とは別だと言いつつた。

さりながら、一方では自分の教えを「至誠教」と呼んだ。尊徳の宗教観は、鎌倉前期の華嚴宗の僧・明恵上人（1173～1232）の教えに極めて近いものがある。明恵の教えを要約すれば、「この人生を誠実に生きることが本當の仏教だ。現実からの逃避や、死後の救いを求めるのは仏陀の教えではない。」「求める心をすっかり捨てて、空腹になれば食べ、寒ければ着る」という生活こそが誠の生き方だ。」となる。

ここに於て、尊徳の和歌にある「腹くちく食うて搗きひく女子らは 仏にまさる悟りなりけり」の意味が一段と深みを増してくる。鎌倉時代に台頭した浄土宗、禅宗、法華宗、などは、その真髄を探れば、仏と人との一体化を目指している。真剣に生きることがそのまま仏の意にかなうことなのである。

仏教の中でも天台、真言の両宗派は、根源的な宇宙仏として、それぞれ毘盧遮那仏（奈良の大仏に表徴）、大日如来を据えた（注・この両仏は根本的意義において同一）。毘盧遮那仏を中心仏とする法華経を信奉した宮沢賢治（1896～1933）は「宗教は疲れ近代科学に置換され然も科学は冷

たく暗い」と嘆き、「いまやわれらは新たに正しき道を行きわれらの新しき美を作らねばならぬ」と農民をして芸術の道へと誘うのである。そして、「農民芸術とは宇宙感情の地人個性と通ずる具体的なる表現である」とする。賢治のいう宇宙感情とは、法華経が説く宇宙仏（毘盧遮那仏）への帰依からくる靈感であろう。しかし農的情緒には憧れたが実際の農業とは生活の上でかなりの隔たりがあつた。賢治は、その死生観を次の詩で語っている。

われとは畢竟法則（自然的規約）
のほかの何でもない

からだは骨や血や肉や

それらは結局さまざま分子で

幾十種かの原子の結合

原子は結局真空の一体

外界もまたしかり

われわが身と外界とをしかく感じ

それらの物質諸種に働く

その法則をわれと云ふ

われ死して真空に帰するや

ふたたびわれを感じるや

共にそこにあるは一つの法則（因縁）のみ

（詩、一九二九年二月、の一部）

実際の農業体験の中から農業の真髄をつかみ取り、それを世に示したのは

熊本県八代の松田喜一（1887～1968）である。彼は百姓の五段階の発展説を示した。

一段目（最下位）、「生活のための百姓」

二段目、「芸術化の百姓」

三段目、「詩的情操化の百姓」

四段目、「哲学化の百姓」

五段目（最高位）、「宗教化の百姓」

神や仏に一番近いところにいるのが百姓であり。神仏と一体化できる人生を目指せ。松田のいう指摘は重要で、すべての生き物を慈しみ、育む行為の実行者であることを意味している。

彼は、到達した最高の技能を惜しみなく弟子たちに与えた。経営者感覚の農民は、最高の技術的ノウハウは絶対に競争相手である同業者には教えない。これがビジネスの本質だ。しかし、松田の示した百姓の本質は経済行為を超越している。この超越を考慮しないで、「生き物を育て、貨殖（金儲け）を図るのが農業」と認識し、国家の政策として企業

的農業が推進されたところから自給的小農（百姓）は消え去る運命に置かれた。この状況のもとで、小さな有機農業をやり抜くには、それなりの決意が要るし、根性が必要だ。

労働の本質は対象の中に自己を形成することである。これは百姓の特権であつて、自分が自分である―自由である―ためには、神仏に近い百姓になる以外にはない。つまり銘々が自分教の教祖となることである。



宗教の進化——国家神から宇宙神への飛躍——

キリスト教の唱える「隣人への愛」や、仏教の第一戒律である「不殺生戒」を忠実に実行すれば戦争は回避できたはずだ。しかしながら、人類史は戦争の連続である。人類の救済を目指すべき既存宗教は国家主義の道具と化している。いまや、それを超える新しい宗教が必要なのだ。国家の枠組みを超えた宇宙的規模の視座をもつ宗教への進化が求められている。これにこたえるためには有機農業の実践を通して、銘々が有する慈悲（大悲）の心——絶対に農業で生き物の命を奪わない——を発掘して、他から与えられることを待つことなく、自分教の教祖となろう。

鈴木大拙は随筆『石』でつぎのように指摘する、「今日の仏教者は、全くわすれたようにしているが、仏教の根本義は、人とその環境とをひとつのものに見るのである。草や木は言うまでもなく、石や土までも生きものになるのである。（中略）。人間には実に魔手がある。この魔手は、しかし悪魔の手でなくて神そのもの手である。これを忘れてはならぬ。魔には創造の力がない。破壊するだけだ。それは彼には大悲がないからである。悲は実に創造力なのである。近代人はこの悲を欠くので魔王のごとくに荒れまわる。」（『東

洋的な見方』岩波文庫）世界禪の確立を生涯の悲願とした彼の、戦争への真摯な反省が読み取れる。悲（慈悲）は創造力であるという指摘は誠に貴重である。

一口に仏教といっても教義の内容（経典）は時代の変遷に伴って変容している、という事実は、江戸期の町人学者・富永仲基によって鋭く指摘されている。しかも経典の内容は、ことごとさらに難解である。ゆえにその解釈は専門僧侶の特権であった。特に密教の奥義は子弟以外にはうかがい知れない仕組みとなっている。しかしながら、死の危機にさらされながらも在家の身で難解な経典の真髄を体得した例を挙げたい。

戸田城聖（創価学会二代目会長）は治安維持法違反の容疑で2年間の拘留所生活を送った。この中で法華経を熟読して、「仏とは生命である。自分の命にあり、また宇宙の中にもある、宇宙生命の一実体である」との結論を得た。「我というのは宇宙のことだ。違うのは肉体だけで、生命には変わりはない。」という認識に至ったのである。創価学会の基礎を築いた戸田の言葉は、四十余年にわたる有機農業の実践を通して得た私の思想をすでに代弁している。

道義の確立が望まれる日本農業

同じ種に属する生物は、おたがいに助け合う（利他）のがその本性である。時には競争原理に支配されているかにみえるがそれは宇宙生命の本質ではない。次の感動的な事実を、フランスの動物学者はタイの自然保護区で目撃した。視力を失ったメスの象が他の血縁関係のないメス象に道案内をしてもらっていた。低い声でお互いの存在を知らせあいながら、緊密な友情を築きんでいた。案内役の象は明らかに快樂を感じながら、この行動を選択していた、というのだ。

強い自我意識を持つ人間は生死の海に苦しんでいるが、救いは「利他」の中にある。この宇宙仏の大法則に自ら

はつきり言って、欧米に比べてわが国の農業者の環境倫理は低い。特に中山間部の高齢者には、違法に農薬を使うのが農業技術であると心得ている者も見られる。戦後の食糧難を切り抜けるために、農業は政策的に大切にされ、違法摘発も緩やかであった。さらに、保守党の大票田でもあり、政府補助金もふんだんに与えられ、一部ではこれを不労所得と受け止める向きもあった。

身を投じることが自己改革であり、即身成仏である。具体的に言えば、それは、「不殺生戒」を虫や微生物にも及ぼすということだ。農薬によって虫を殺さないという決意の一瞬が救いであり、この一瞬の裡に無限の慈悲があると私は思う。

有機農業は、農薬で虫を殺さないという大原則があるが、これがすなわち仏の「大悲」であり、菩薩の慈悲の心である。中江兆民のごとく、宇宙的立場に立って生命を見つめたとき、虫も人間も同列であるからだ。宗教の内容は広大で一概には規定できない。宗教も時代と共に進化するのだ。その時代の大衆の心をつかまない宗教は必ず衰退する。

現代の日本農業は大量の農薬散布で成立している。しかも農薬の散布回数は驚くほどのスピードで増加している。昆虫や微生物、菌類が薬剤耐性を次々と獲得している。微生物や昆虫に比べて、高等動物は体細胞数がはるかに多いために、農薬耐性は彼等より強いが、その限界は意外と低いのもかもしれない。特に妊娠中に胎児が農薬にさらされるのが一番怖い。農薬耐性生物と強力な新農薬開



発との果てしない馳騁ちこうごっこの行く末は、農業生態系の破滅である。我々は、この日本列島に生まれてくる幾億人の子孫に立派な農業基盤を遺す義務があるのだ。農業に限らず、現代のすべての分野において科学信仰と工業的能率信仰とが自然環境を破壊し尽くそうとしている。

つぎに、わが国の有機農業に目を移そう。これも欧米と比べれば低調である。数少ない有機農業実施者の中には、安心安全の食品の生産・販売が意識の大半を占めておられる方が多い。これを営業宣伝に使うのも結構だが、それでおしまいであまりにも惜しい。有機農業の認証を受けて、栽培法の正当性を事務的機関にゆだねている方も多い。本来、これは有機農業者自身の職業倫理に任せるべきことである。現代の有機農業にはもつと深い意義がある。

政治の世界も道義の退廃は目に余るものがある。この実例は書く必要がある。

見習うべきガンジューの教育論とその思想

わが国の学校教育は頭脳労働者の養成を基本としている。また、父兄も我が子を有名大学に入れて高所得の職業に就くのを期待している。こうした状況下で農業後継者がいなくなるのは当

るまい。が、政治は次第に戦争への道を歩んでいる。これを回避するには、すべての人がその視座を国家から宇宙へと大転換することだ。感動的な言葉を紹介したい。「考える機会が多いほど、また長ければ長いほど、常に新たな感嘆と崇敬をともなつて私の心を満たしてくれるものが二つある。それは我が頭上の星座と我が内にある道徳律である」これはドイツの大哲学者・カントの墓石に刻まれた語句である。農業使用が普及する以前は、食料生産は、まさに宇宙神の意に沿う善行であつた。ところが世界有数の農業使用国に成り下がったわが国農業は出口の見えない迷路を歩んでいる。その第一の原因は、狭隘きょうがいな農地に適した農業を見失つたことである。さらに加えれば、農業者の価値観が個性を失い、都市住民のそれと同様になつた点である。国民の価値観の形成は、教育を抜きにしては考えられない。

気の毒にも先生から見放されて、「落ちこぼれ」という失敬な表現を甘受させられている。

現行の教育は、教師が知識を授け、それを生徒が暗記する仕組みだ。この方法では知識の創造から生徒たちは疎外されている。あくまでも与えられた知識の範囲内での思考しかできない。独創的な個性を伸ばすには、技能教育から理論を導くところの能力の養成の必要性を、私はずっと提案し続けてきた。(その最初は、『農業教育』No.5・農文協・1970)。この度、片山佳代子さんの翻訳・編集、『ガンジューの教育論』(星雲社)を拜読して、偉大なるガンジューは、すでに1930年代に同じ趣旨の主張をしていたのを知つた。彼の教育論を、荒っぽく要約すれば次の通りである。

①我々の今の教育では事務員を生むだけだ。
②教育は手工業という手段を使って行うべきだ。肉体労働を知的に行うこと。

③生徒は農業と肉体労働をとおして文字、言語、算数などを学ぶべきだ。

④英語および西洋の価値観からの解放。片言英語でインド人同士が意思の疎通をはかるのは、固有の文化の喪失につながる。民族言語を大切にしよう。

とくに私が片山さんの訳書で注目したのは、「ヨガとは仕事をする技能である。」とギータ(ヨガの聖典)の言葉を引き、「ヨガとは一体を意味します。神々と一体となることがヨガです。仕事をすることで、難なくそのような一体を体験できると、母なるギータは教えます。」(p.61)と述べ、仕事に没頭することの重要性を強調する。

思えば、肉体労働を知らぬバラモン階級はヨガの技法である禅定(座禅)によつて三昧境さんまいを味わつた。一方の農民は労働で三昧に入る「労役三昧」。これが肉体の苦痛から逃れる術でもある。ヨガは彼らの仕事と一体化しているのだ。私の生地・四国の松山地方では、農作業に没入できない人を「能が研げん」といつて軽蔑していた。かねがねガンジューが偉大だと思われたのは、非暴力抵抗によつて人種差別撤廃の運動を行う際に、37歳の身でありながら妻との性交渉を絶つたことである。理由は、何事かを他に要求するからには、それを補うだけのものを自らが捨てなければならぬという、倫理的信念である。清貧を理想とする東洋精神の真髄をここに見る。

横浜市鶴見区獅子ヶ谷にある橘学苑・私立橘女子中学校には個性的な教科「創造」がある。一年生は、飯島興介先生と共に、昔ながらの土を耕し、種を播き・実を収穫し・粉にして、パン焼きまでを体験した。鈴木美鈴さんは、このように感想文集に記している。「なぜ輸入小麦が安いからといって96%も輸入するのか、私はすごく不思議に思います。そして私はこれについて、日本はお金にこだわっているのではないか、また昔ながらの農業の私たちがやってきた根気を忘れて

いるのではないかと思えます。私はこの一年間創造の活動をやって、こういうことが分かってよかったなあと思います。」農耕の実践はかくも見事な批評精神を育むのである。

橘学苑は土光登美女史によって昭和17年に創立され、当時は橘女学校と名乗った。登美女史は、ロッキード事件後に経団連会長となり、企業からの政治献金の停止を提案した土光敏夫氏のご母堂である。女学校設立後、登美校主が力を注いだのは、農作業を重要な教科目として位置

付けることであった。この精神が先に述べた教科目「創造」に力強く息吹いているのである。登美先生は、「正しきものは強くあれ」という言葉を残した。現代の無気力な世相と、守るべき第一義を見失いつつある教育への警鐘と承知する。

農作業という土に接する行為で涵養されるのは、橘女子中学の生徒がいみ

現代有機農業の真髄 — 無農薬を決意したとき自分教の主となる —

機心を制する「農業の根気」

登展信仰と業績主義にとり付かれた

脳を洗うには格好の話が「莊子」天地篇・第十二の十一にある。孔子の弟子、子貢が旅の途中一人の老人を見た。切りとおしの道を降りて井戸端にいき、甕かめに水を汲んで、それを抱えて上ってきて作物に水をくれている。なんとも能率が悪い。歯がゆく思った子貢は老人に「跳ね釣瓶で水を汲みあげ

じくも指摘した「昔ながらの農業の根気」である。農作業に黙々と根気強く従ううちに、省力、効率に支えられた業績主義とは異なる世界の住人となる。もの作りに手間ひまをかける、これが本当の豊かさであると悟るのである。換言すれば、農業の根気をおし、物の世界から心の世界へと誘われるのである。

機械による能率向上で支えられた産業社会の間には、受け入れがたい心境だとは思いますが、機心の産物である機械文明によって大殺戮戦争が起きたり、地球環境が危機に瀕しているのは厳然たる事実だ。少なくとも二千年以上も前の物語の中で、かの老人のごとく機心を制して、心を純白に保つことの重要性が強調されていたのである。

この物語では、水をくれてやる農

作物という物の価値の対極に純白という心の価値を置いている。誰しも双方の価値を手にした。古来より人はこの両個性 (Ambivalent) の

矛盾に身を焦がしてきたのだ。老人においては、矛盾を解消するのが「からくり」仕掛けの排除であった。能率を落として物を得る。同時に心の純白を損なわない。つまり、機心の制御で二つの価値を全うするのである。

右の立場を現代有機農業の価値観の真髄として提示したい。なぜならば、伝統農業の世界では、生産性と永続性が常に均衡を保つ形を探りながら、農法として伝承されてきたの



だ。現代農業という営みの中から機械（からくり）と農薬を排除するとき、果てしない労役が降りかかり、肉体は苦痛に苛まれる。この苦痛から逃れるには、無意識の境地に没入することだ。つまり労役三昧の状態に入らなければ肉体の苦痛を忘れることができる。これには、単調な作業に慣れる根気が要る。さらに根気の源泉は健康な心身だということになる。

かの水汲み老人のごとく、機心を遠

ざけて心を純白な状態に保つことのできる肉体こそが健康だといえるのである。肉体に病があれば、病の苦痛から開放されたいとの一心にのみ止まる。我執の磁気が心を一点に引きつけてしまふ。我執の磁気を遮断して心を自由自在の境地に転がすのだ。たとえてみれば、泣きも笑いも心のままの赤子である。さらには、泣きも笑いも超越した純白の心に至る。莊子は常に心の有り様を問題とした。

有機農業の第一義は不殺生戒

万物の生は宇宙の主宰者の意志を具現している。この意味であらゆる生物は同胞なのであり、すべては共生関係にあるといってもよい。有性繁殖においては、精子と卵子という生殖細胞（配偶子）の結合が必須の行為である。雌雄ともに減数分裂によって夫々の配偶子をつくる。このとき自らの有する染色体を半減する。つまり、自己の遺伝子の半分を捨てるのだ。そして、お互いに遺伝子の半分を捨てた相手細胞と合体して、染色体数を復元し、次代の生物の誕生をみる。子は両親のいずれでもなく、あくまでも子は子である。大切なのは「我執を捨てる」という根本原理によって、我々は生を許されたという事実である。ここに生命倫理の第一義がある。

宇宙意志・万物は共生する

ければ消化できないという原罪を背負った動物である。だが一方では、食を得るための苦役を三昧の境地によつて癒すという恩寵を主催神から授かっている。この恩寵を享受するには労働に耐える肉体が必要であるが、工業文明は省力を目標としており、人間を限りなく知能ロボットに近付けていると考えられる。我々はもつと自然界の生き物から学ぼう。そこから「棲み分け」による共存と、無用に他の生き物を殺さないという「不殺生戒」が見えてくる。私の唱える「皆でやろう小さい農業」は、食糧自給とともに、本節で述べた内容の実現をも意図している。

現代での我々の置かれた状況下において、農薬・化学肥料を使わないというのは、それ自体が自分教の教祖である。その根本教義は七仏通戒偈の冒頭の二句である。

諸悪莫作

(悪いことをするな)

自淨其意

(みずからその心を浄めよ)

キャベツにつくアオムシは、腹いっぱい食べることで満足して、人間のように食を貯めることをしない。まことに敬愛すべき存在ではないか。人間は自然界の生き物を調理してからでな